



若者へのメッセージ 25

プロスキーヤー 三浦 雄一郎

【第二回】心と身体を鍛える ——それが夢への土台

大学の研究室を飛び出し、山小屋へ荷物を自分の背中で運ぶ強力^{ちゆうりき}となった。百kg近くの重荷を背負い、山を登り、山を走り回ったことで鍛えられた心と足腰。その積み重ねが私の力強い土台となり、夢への土台ともなった。

山小屋へ重荷を運ぶ強力になる

私は出遅れた人生だった。仲間のスキー選手達が現役をやめる年頃、二十八歳になってから世界へと飛び出す。心ひそかに「俺は日本一のスキーヤーになれなかったけれど、これから世界一の何かになってやろう」と闇雲^{やみぐも}に決意していた。

それまでは日本の型にはまった大学受験生をやり、大学生からそのまま国立大学の国家公務

員となり、トコロテン式に押し出され、あれよあれよという間に自分の意思や夢などもなく、人生の海に流されていた。

しかし、私は思い切って公務員を辞めて無職となり、地を這い、山をよじ登る労働者になっていた。

それでも、「俺は、二流、三流のどん底の人生へ自ら飛び込んで、そこから世界一流を目指すんだ」と思いつめたけれど、あがいている時の無限とも思える焦りによって、夢や希望が霧の中にかくれ、吹雪に消し飛んでしまったと思

いたくなる「冬の旅」となった。

私は重荷に喘ぎながら、毎日山を登っていた。それは登山というものじゃない、半ば職業と化した仕事として山小屋へ荷物を自分の背中で運ぶという強力^{ちゆうりき}(歩荷)の仲間に入っていた。

日本アルプスの立山、剣岳^{つるぎだけ}の山道をギイギイきしむ重い音を立てて歩いていく強力たち、あの一流の強力のように強くなれたらと思う。あの汗と喘ぎの中で踏みしめるたびに地球にめり込むような重荷を担いで一歩一歩登っていくとき、人は何を考えるのだろうか？ そこから人はどこへ行くのだろうか……。

大学の研究室を飛び出した私であるが、性に合わない頭脳労働よりも、こうした単純極まりない筋力の重労働に心が惹かれていた。

自分で志し、仲間に入れてもらった三年余りの強力の仕事で、百kg近くの荷物を担いで登れるようになった頃、何故か私の中に「自分で地球を支えることが出来るのじゃなからうか、いや確かにこうして地球をどっしりと支えているのだ」という実感がみなぎり始めた。

重荷を背負い登り続けると、その荷物を下ろしたとき、身体に羽が生えたように軽くなる。その軽さを感じて山を走り回った。無我夢中、がむしゃらに山々を走り回っていた。昔の天狗や忍者もこうだったのだろうか？ 走り回って

は再び重荷に喘ぐ生活。

この向こうに自分が目指した世界への道があるのだろうか？ まだ何か分らなかったけれど、その先にある新しい大きな世界が、遠くで呼んでいるような気がした。

それにしても体の中に不思議な山の精のようなものがみなぎり、どこかへ飛んでいかねば収まりのつかない衝動がこみ上げてくる。それを押さえるにはさらに重い、辛い荷物の下で喘ぐ必要があった。その頃は運動生理学というはつきりとした形ではなかったと思うけれど、そんなことを飛び越えた古代の武芸者の修行のような山籠もりを続けていた。

三十歳近くで世界プロスキー選手権大会に出場

北海道大学に残っていたらレールに敷かれた



まま教授になるというコースを、自分で捨ててしまった。いささかの後悔の苦しさも、さらにこうした重労働を支えていたのかもしれない。

見えていたエリートコースの特急券を捨てて、どこへ行くかも知れない遠い遠いあてのない重荷の人生の旅を、自分で背負い込んでしまった。それに気がついても、もう帰る家もない旅に出てしまったのだ。そして強力の仕事しながら、もうひとつの手がかりを英語の勉強に求めた。

立山に来た山好きなアメリカ人たちと友達になり、その人の荷物をかつぎ、山案内を兼ねて彼らが歩き回った世界のことを聞くたびに、心が騒いだ。遠い夢物語、私にもそんなことがありうるのだろうか。

しかし時代というものは向こうからやってくる。一九六二年の世界プロスキー選手権大会。重荷に喘いでいた人生の漂流者にとって、この

アメリカでの大会に私の新しい人生のすべてがあるような気がして、飛び込んでいった。

人は初心に返ると歳を忘れる。三十歳に近い私にとって、年下の二十代の世界の名選手がすべてにおいて私の大先輩である。世界のトップレーサー達の雰囲気は大学の優れた研究者達と似ている。人は長く憧れ望んでいた人生のロールモデルや世界に出会ったときに、心も魂もそして肉体も蘇よみがえるのだ。

長く辛い、重荷に喘いだ年月の向こうにある確かなもの、本当に自分がチャレンジしたかったことに出会う。その世界へと入ったとき、あの重荷に喘いで山を登り、山を走り回ったことで鍛えられた足腰、動き続けた意志や心臓がどれほど頼りになるか。その積み重ねが私の力強い土台となってくれたのである。